加齢黄斑変性に対する光線力学療法の1年後の視力に影響する因子

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 都筑, 賢太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2000969

順天堂大学　博士（医学）
氏　名　　　都筑　賢太郎

論文題目　　加齢黄斑変性に対する光線力学療法の1年後の視力に影響する因子

論文内容の要旨

滲出型加齢黄斑変性に対する光線力学療法（PDT）の1年後経過の視力に影響する因子と治療成績を検討した。

PDT施行後1年以上経過観察できた138眼をAMD群（101眼）とポリープ状脈絡膜血管症（PCV）群（37眼）に分類し，1年後の変化を検討した。log MAR視力にて0.2以上の変化を改善または悪化とし，術後に小数視力が0.6以上に改善したものを視力良好改善群とした。

AMD群では1年後の視力変化は，改善23眼（22.8%），不変51眼（50.5%），悪化27眼（26.7%）であった。PCV群では改善13眼（35.1%），不変16眼（43.2%），悪化8眼（21.6%）であった。術前視力と術後1年後の視力の間には正の相関がみられた。視力良好改善群は30眼あり，術前の視力が有意に良好であった。また，3回以上治療した症例は，術前の視力が有意に低下していた。GLDと治療回数との関係については，小病変群では3回以上治療を行った症例が有意に多かった。

PDT施行1年後における視力は，全症例で74.6%，AMD群では73.3%，PCV群では78.4%が維持または改善を示した。日本人のAMDに対するPDTは，少ない治療回数で有効であった。PDTはPCV群に特に有効であり，自然経過で悪化が予測される場合は，早期の治療が重要であると考えられた。